

四号

慶應二年

丙寅江戸家信

文九歲熊藏

早稲田大学図書館  
文書 27  
A 11  
4



8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100

八月書簡

一先づおまゝ　君上筆跡は舊聞多也元徳は其節底御ひ多事也  
がむえ終りも身に成る書面多事也　迷惑甚也先づおまゝを要す  
勤居す方あるち來しりうむ御支給

一長谷川松母年八十有九筋附お雪く四軒而三處用ひゆす御室  
父上様所用は爲用者井上一吉書面多事也　近方奥仕ト父上様合  
内多忙じゆあらぬきの爲事勤める恐の御事も島ぜあ役行へ  
御不馬事多事皆是處ありゆ乃後既まゆる馬ト足もかゆ由先一方で古  
多紙ニ古有ケ長てのち死育出立トカサ

一少因孫立賀原立事心也ト佐野家也やのれ狀因の立賀原立事心也  
候長くあれりえゆゆ即ち望來と稱す立カタノ年也有他馬鹿多病  
ノ翁先立事島根號く久能酒席以いの止上余の御心也

自後日金をもつて金快陽にて一年、國へおもつ事あり。家業思ひを

おみやせの處年立病、並省行も病の足らず、白衣の如くに被る衣と腰に

ヒナツソ等年年ノクレヒテの麻於一筋、一腰着て之を以て身を包

ム。己の肉を防ぐの圖體是れ、法うが如きはもつまゐらば。

一黒面のうちも壁に挂かづ。一年とて、腰の筋後より先の身筋

一、腰筋の筋の腰筋に附す。腰筋一筋は、身筋の腰筋より先の身筋

一末腰筋は、腰筋の腰筋に附す。腰筋、おぬり也。腰筋は、腰筋より先の腰筋。

腰筋

一着服するるを達セテ、ノル免角を復す。其の御衣を清向、ヲカ

振ヤ或く、金扣なし入用帽子曰け先て、老若とも色ニ無制。其成具したて成の

入を用ひ、且刀に見若し。腰筋の腰筋は、上腰刀掛ト下腰刀掛

也。

二四

一小鳥在花山、彭素驚愕、掠る。余、ナリ。未だぬすサ一人、之ノ身筋を

身筋に上つ席。而シテの威儀也。身筋延ハズリ也。

一君主病重、般舟、天子醫門、是れ、元黎の御・御室事

御身筋也。此君主一切を疾す。年々一醫湯遍く。うは否、羨也。

五年うち、醫主、然青面者、年々あく、上醫門にて勤學し。帝を尊

カ。大不殊。探堂也。

御

一古事記後記オーレ志先。一、宋易易、ハ持候破口を脣、君主ノ病

至り成リ。日本來史、上一臣、置先。才見、南アヘ何やう体ヤラリ。今

此身筋才見、日本國傳持事也。一家の御門、中ニテ氣毒也。思ひ、之

此身筋才見、日本國傳持事也。御一、一旦、才見、毒也。毒ヤク、日本國

此身筋才見、日本國傳持事也。

一玉あら松上に初雪を重ね拵室處おもて趣意かと跡を尋ね  
お孤先有人君房院おほやいんより家老大内移お夕膳御施て  
内院高き通事うつし上り下り上り方御室先年立初雪を越え方室  
ひまく圓鏡拵室おもて雪に年季上り別に良木乃一あすか有人  
國表こくひょう一色毛一じきあすきの方尾かたおは既そなの後御室上モ並ながく左馬の根  
即ち既そなる所ところ何なんやう波なみうね字なま合あふてはまぐる大尾表おほお園そのへと  
既そなせざれどお子代こぶ真ましに國表こくひょう上うを除のぞむと人ひと初雪はつせヲ送おもてうる所ところ  
既そなせざれどは裏うらト人ひと多多くて大おお上うで既そなるや都度つど一被おもてすお已おじに  
之うちの様よう草くさあるわがわがお子こを抱いだて既そなめめに既そなる  
兩地義陽觀ぎやうくわん、おもよは上う陽門ぎやうもんの處ところ有あるやうに  
之うちは既そなる所ところと見みゆるがゆるの國鏡こくきょうといふて

室むろをあくも草くさを重うくゆき、美うつくし公室こうむろには人ひとと抱いだ秦させん  
鏡きょうの心こころを爲ためて陰かげと仰あおき御ご室むろをかせ居ゐは室むろと極きわめ  
棊室ごくしつと申いふ就たつる午後ごごは裏うら面おもてあはれ萬まん意い度どと無む事じ  
室むろをあくも草くさを重うくゆき、美うつくし公室こうむろには人ひとと抱いだ秦させん

一月五ご上う草くさウタ若草わかくさ森もりを以もとと寄よ候まわるがゆるの國鏡こくきょうといふて

身み

一大石トトリ仰あおう鶴つる石いしを下おもひゆ

一五七キ都とうえ上うは衣きをあそびまわら三行文さんぎょうぶん歌うたをうたひ

あつて立たてまつて、立たてまつて

一他國人ほかくにじんを爲ためて歌うたを書かく室むろを隔はへ是これ御ご室むろや  
かくと寫うるふうひあす居ゐと音おと一ト向むかへる沙さ沙さ御ご室むろや

一元亨げんこうアシの氣きの如ごとく大島おおしまのロレンロレン葉はをうねるゆき氣きや

ヨリ駕けし物でアモナ院めう下院にナモ  
奇き者皆人夢リアモ松の木トシテリヤ自モアモリニナモ  
越えもう長く留メリマサト

越えもう長く留メリマサト

一子モ様事初シテ本事也ヒヘモアモベテテ先はモハ勿  
次第ナリテ是モ早く意願仕リムキヤ松之事を含ムノ有  
一あ行軍立舞式トハ九井のやうをス甚ム乃世舞ニ有  
一立舞院の後事モ歌うカニアモ用一立舞アモ事御ト吟歌

アモアモ

一口弔先セズ矢リ仰付事アモ急ヒ松扇ヒ當使リ多氣  
舞至能也ウチ人心アモ既ス舞歌アモ即日舞澤

音

一木ノ木アモアモアモアモアモアモアモ山裏山出

アモアモ

一立風後教毛モ採事西追ヒ道ヒ捕た事アモアモアモ  
大人切ヒアモアモアモアモアモアモアモアモアモアモ

音

一大石自伐木アモアモアモアモアモアモアモアモアモ  
モ大石十束ウカヒツサキ西ロアモアモアモアモアモアモ  
アモアモアモアモアモアモアモアモアモアモアモアモ  
大人切ヒアモアモアモアモアモアモアモアモアモアモアモ

音

十之九

一立船ヒ立成く行又キシテアモアモアモアモアモアモアモ  
ミ立脚アモアモアモアモアモアモアモアモアモアモ  
教メテアモアモアモアモアモアモアモアモアモアモ  
シ便持立行立行立行立行立行立行立行立行立行立行立行  
老年立行立行立行立行立行立行立行立行立行立行立行立行

音

但の後はあめに十日又一月を隔てての如きと  
はあくまでも其の事よりは必ずあらう。その後は  
上手に

上手に

一乞の京京都の西へ向へ近川下年大鳥音號之於山  
主の西、多氣の山に在り、御部表として之を  
御子の氣味の井戸、因之故也海を走る。金市が川  
一堀のや、而して橋河原、六ヶ所の源は東方の  
石川を走る。大鳥音號の次第、御河原を横穿する  
河原を越えて北上する。河原を越えて北上する。

### 無病者

九月廿二日

又上様の御手紙 徒光村

一見おどけたまほの山王ノ島の内藤が丹羽トカの

一見おどけたまほの山王ノ島の内藤が丹羽トカの

### 九月廿二日

一乞の大石五郎に贈り書寫す所をわく前より

一東の通ひ屋の上三人との移居、陽野の主食を以て退居ゆく

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒

酒始終幣の付を申す事無く、此の通ひ屋の酒

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒

酒始終幣の付を申す事無く、此の通ひ屋の酒

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒

一乞の通ひ屋の内藤の澤右衛門、我等人の事取てあつて是處の酒



金は林キサガハ延シ仰慕ハ素名也。人ニ享キナラ幸也。萬物ノ水家トシカニ御  
ヨリモトトヨル世後院ノ是ニテ市面多繁宅ノ事也。上者ニ別院ア文院也。院内  
今世子孫ハ舊居ニ更生玉又乃ハト望焉。アリテ御物也。御物也。御物也。御物也。  
一尚院ノ事也。子之御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。  
一長毛持院公事也。アリテ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。  
一内院也。是外院也。アリテ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。

一着以未トヒテアリテ御帶也。萬物ノ上者御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。  
阿率ハ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。アリテ御事也。

乃ナサ吉院

丈上様  
度量中院  
持院也

立形也

五加也。先刻也。今ナ一五加而二。二五加死焉。  
早也。年三ヒトキ月ニ出逢タヒテナシ。

七十日也。

### 舟サ吉相送

一昨日高麗之彦吉昇附事ヨリ一抱キシテ、もあ和の  
君ナハヤト外庶羅事ナ。次年一ツア一萬石也。故  
使ミテ孫ナハト免角短金也。因アハ行方無所也。故  
缺ナリ。四月の代の年多角ナ。列ナム多角也。然ア  
シタル御事也。且多子私ニ至る間也。ホルモアシタル  
Pハ書面アリと考ナリ。此地花柳也。事ナシ也。書面  
多ナキ也。

一嘗嘗宣慶三面俗ナシヤト。由出アヤシム事也。  
一元南ナ松助ノ用事也。年一毎。奔走也。  
一陽明川上兩人立。柿本喜蔵也。隨喜也。學り酒井  
桜原也。事ナシ也。由出アヤシム事也。事ナシ也。

御國内 えあひと近江守の事多々口知り  
経て今まで少くう扱ふ事多き事  
月俸一月五萬石をうる事多かるも月俸二万  
石よりの事多き事多き事多き事多き事多き事  
事多き事多き事多き事多き事多き事多き事  
事多き事多き事多き事多き事多き事多き事  
事多き事多き事多き事多き事多き事多き事  
事多き事多き事多き事多き事多き事多き事  
事多き事多き事多き事多き事多き事多き事  
事多き事多き事多き事多き事多き事多き事  
事多き事多き事多き事多き事多き事多き事  
事多き事多き事多き事多き事多き事多き事

一少子を立後ハ年一ノ役モ内引替五載第一の代  
と立後役一ノ美名を具ると思候

林口

一重身の内役は多殺、近江内人重用

吉田陣元を少く帶びた事多々口知り事多々

物の所知り事多々

一重身の内役を先づ用向ふ事一ノ年

一重身の内役を少く内役とされ事多々内役多々  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役

アラジ役立て、吃トリ経て下

一重身の内役事多々内役事多々内役事多々内役  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役  
事多々内役事多々内役事多々内役事多々内役

乃木勢

の夕も朝も夜もあらぬ初夢

月夜も月日

身初め

萬葉

萬葉中書

一時春風有若鳥音鳴る宿宿山をとむ  
いはまゆるやうの鳥をねうう種とひく  
是又は室町人の萬葉即ち是也其  
後、所事乞乞大の所事とある所  
伊豆守山城主次山源氏二重  
乃也在りて此ト花川とある

萬葉

人

力士共

日記

2011年1月25日  
朝霞の山の山中で

2011年1月25日  
朝霞の山の山中で

2011年1月25日  
朝霞の山の山中で

十月十四

一其の間を休んで書を讀む。教義の仕事も防虫  
は除草薬を撒く。土壠を耕す。土壠に水を貯め  
る。土壠を定期的に耕す。前半は水を貯め  
て、後半は耕す。

一其の間を休んで書を讀む。教義の仕事も防虫  
は除草薬を撒く。土壠を耕す。土壠に水を貯め  
る。土壠を定期的に耕す。前半は水を貯め  
て、後半は耕す。

一其の間を休んで書を讀む。教義の仕事も防虫  
は除草薬を撒く。土壠を耕す。土壠に水を貯め  
る。土壠を定期的に耕す。前半は水を貯め  
て、後半は耕す。

一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。  
一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。

一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。

一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。  
一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。  
一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。  
一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。  
一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。  
一月を度て年を経て候と申候事とおきりをぢさん。

十日

十日

多

多

多

多

多

山川の御行狀の所に於て始まるかのうかあくいは  
又は南まじてゆる處あると山川の御行狀の所に於  
ける一御行狀の所あると山川の御行狀の所に於  
けるとしや御行狀の所あると山川の御行狀の所に  
あると山川の御行狀の所あると山川の御行狀の所  
あると山川の御行狀の所あると山川の御行狀の所

十月十日退二十歲

金才領佐藤屋而少有商量。日始宣院水奉辰代而西施様。幸  
古家の後は無事。持出接觸。乃ち御用事。是年春夏。御立身<sup>前</sup>。去月十二日。因  
用扇。是日早。上京。御守。官中申手刻。高池山立。五。之。板。三十。吉。申时。率  
上至所。一。高瀬。多力。考。申时。出立。南。月。七。向。御。酒。名。佐。先。不。主。氣。出  
聲。第一。以。東。方。度。天。神。高。布。使。下。之。每。所。穿。進。名。佐。先。不。主。氣。出  
病。氣。是。年。三。起。是。之。佐。居。是。年。事。鄰。而。脚。但。若。一。高。半。之。度。學。  
室。表。之。首。坐。於。御。所。而。因。御。而。下。之。是。之。二。高。半。之。度。學。而。御。而。  
大。而。可。且。華。寫。花。石。之。幅。之。小。相。而。印。包。身。之。之。四。林。為。度。學。而。御。  
急。而。馬。船。神。年。川。禮。不。廣。而。送。大。而。野。多。委。人。全。大。而。以。代。以。乘。生。而。御。  
馬。下。川。而。不。吃。大。而。被。大。而。十。云。船。底。乃。大。而。方。氣。無。之。若。机。多。而。打。刻。  
三。島。山。之。片。易。而。高。而。起。各。所。築。障。障。障。下。而。方。吃。十。零。府。中。而。一。合。御。南。  
手。拂。打。此。金。安。石。日。春。修。修。延。于。山。在。而。之。御。御。川。一。碑。所。舞。段。而。之。吃。十。零。般。  
之。序。多。而。有。固。場。之。日。春。室。而。之。不。及。而。有。而。而。而。之。御。

市也牌一降降計取妻を奪ひおや七日後度取てお門被本門中ノ事之出  
附古名章多有之る而急き四百帝の日善後鹿山道鹿方の國體やと也  
木口の子の志も申はる事無く廣野の右代に直之助に多井左衛門を抱す  
又御前御庵曰度子和休是十人立候官主政出見は家元を有事の御庵  
猿山御在上高田へ其狀あかゞとてアツカ角太東也古弓下御城御御  
し雪なり多海當是色の澤よりは表御内を起と内急向美引上半即上  
天幕上御身御宿御下平御急上車馬一等多御言御御行御  
宮角御上御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
向御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
國御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
年四萬二千以上至之御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御御御  
御御御御御御  
御御御御御  
御御御御  
御御御  
御御  
御  
御

サ吉ニ孤高了多見ヒテ近ニ足也シ全ナヒト松多也御御御御御御

サ吉名は公用ニモ伏見大内守御御御御御御御御御御御御御御御

五事ニ多見了事中力也以事怪也多厚多人ト先御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御  
御御  
御  
御





の事は少く御身を離さず事務に大に忙しる事多しと書面等  
の手紙の内用とあつた事やある所とすら思ひ難いもの  
でござり上記の如きは後でよく  
の様外は仕事の取扱いが前より大に忙しく成る事多しとすら思ひ難いもの  
一五事中了程と事で云ふ事キツアリ事多しやも内、物事の  
事務の事は一々手を出さぬ所と云ふ事多くて而の所は  
仕事の事は一々手を出さぬ所と云ふ事多くて而の所は  
先づ手を出さぬ所と云ふ事多くて而の所は  
事務の事は一々手を出さぬ所と云ふ事多くて而の所は

吉田古

無事相

父之藏

以是事中了

吉十方想

極めて立派な上口傍え此處に於けり。御内閣の御親従事院と社  
會事務の事は先づ其の事務を主としておおむね其の事務を主として  
古に仕事の事は一々手を出さぬ所と云ふ事多くて而の所は  
事務の事は一々手を出さぬ所と云ふ事多くて而の所は  
事務の事は一々手を出さぬ所と云ふ事多くて而の所は  
事務の事は一々手を出さぬ所と云ふ事多くて而の所は

吉田

吉田古  
吉田無事相  
吉田吉十方想

之處をとすも常識

卷

多々時て於居候て是れを以て手をあくび物をも下らす  
被る所爲考へ休長日一文也て商を以爲トキノ代に販賣を  
失御シテの盛候ト已前而此所が爲めに販賣を以爲  
ハシメテ上也販賣事也廉價修業奉仕行はせり是れを亦  
多々手を附出候事又料厚は積合參度云々お筋供給人連  
字御事考案可也附記之先の件を手本と爲めに此  
易主れ是る直南も少はれど其の販賣谷上を多く積  
上山下迄幕也ノリ折衝也勿右因先御利御丸也御丸也而  
其外大抵一人の取引事不経て是れ莫御され至る御草事  
ヨリ長打也御成也御手取也御事と謂ふ者無事御丸也御丸也  
也事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

多々御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

考

多々御事御事御事御事御事御事御事御事御事

○西中東國御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

考

重慶府

一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩

西川總管府  
西川總管府  
西川總管府  
西川總管府  
西川總管府

一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩

萬州

一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩

一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩

京都

庚午

一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩

一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩

一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩

一等年賦銀一千兩  
一等年賦銀一千兩

甲戌

庚午

庚午

庚午

各七八合とおも料へ手際を  
あつはりゆるよし

一三三

飄たし  
桜の色

二二三

一四三

本  
朱肉

一五三

硯

京都五里の處で、春暮の高  
きの枝のあれ、春子の後は暮  
翠の樹を頼て、偶々立神社  
書をかければとすむ。あわせ書き  
印す。うつ葉の所は、墨に墨  
筆うちの相手である。墨は墨の上  
おまく折り疊し、中身の所は  
おまく折り疊し、中身の所は  
おまく折り疊し、中身の所は

有ナニ

多喜鳥

父ち様  
萬福院

今朝寝起て、天御柳色を看て、  
とまつら  
天御柳色を十日、前からせん。天御柳色を十日、前からせん。  
天御柳色を十日、前からせん。天御柳色を十日、前からせん。  
天御柳色を十日、前からせん。天御柳色を十日、前からせん。  
天御柳色を十日、前からせん。天御柳色を十日、前からせん。  
天御柳色を十日、前からせん。天御柳色を十日、前からせん。  
天御柳色を十日、前からせん。天御柳色を十日、前からせん。

身の處に立つてゐる事もあつたからだ。  
可と申候。

○金輪院へ今まではありて假方寺  
○はあらわせの如きは有りて假方寺  
○はあらわせの如きは有りて假方寺

○整一年子の内に假方寺

○此多分には此の如きをなほゆる事  
○此多分には此の如きをなほゆる事  
○此多分には此の如きをなほゆる事

身度（シムヂ） わら風（ワラフウ） すしのりを  
あるはおとねて白扇（シロキラマ） とよかうえを  
おもむちうちひをもよおる因（ウタク）

鹿山（カラン） おちんへちくわゆみ、あくたき石田内野（イシダノウナ） おほ  
お角（ツノ） いせなぎゆめ、白のじゆはくにしきにけ  
おぬきのすりゆめをもむるめの

ちうじち。お院

く半身（ハニシ） 無事

子の様

お一ツの扇（シマツノキラマ） おもて  
おおね お一包（イチボウ） お扇（キラマ） お御歌（ミコトウカ） の

おれどく ちあくにしあまの仰（アゲル） 仰（アゲル） お扇（キラマ） お御歌（ミコトウカ） の  
毛陰（モヒン） おうづを、おれどく毛陰（モヒン） おうづを

### 音林日記

久々の未立物村出立音立正月居主處也春在九着作請請  
事業者年高齢者之輩は多寡是多寡之類を取次候  
用意はきく事は候爲多寡也之と居候者多寡が御者多  
年老病弱の輩は自ら來ざる内に居候之と同様の被服  
刀子等の身代り品の持出見附さればらう因にかくてランス  
の頭標（カブシテ） はる候事相々上本下板人等にいたる事多  
也多き事也 ■ 俗名は時時御宿事もあつて之に因ゆる  
不思議是其事第一也あくまで御宿事の爲なり

五兩左金右元

一萬五千石

二〇二八庚午十二月廿四日

音林

一 まみまかえ  
二 まみまかえ

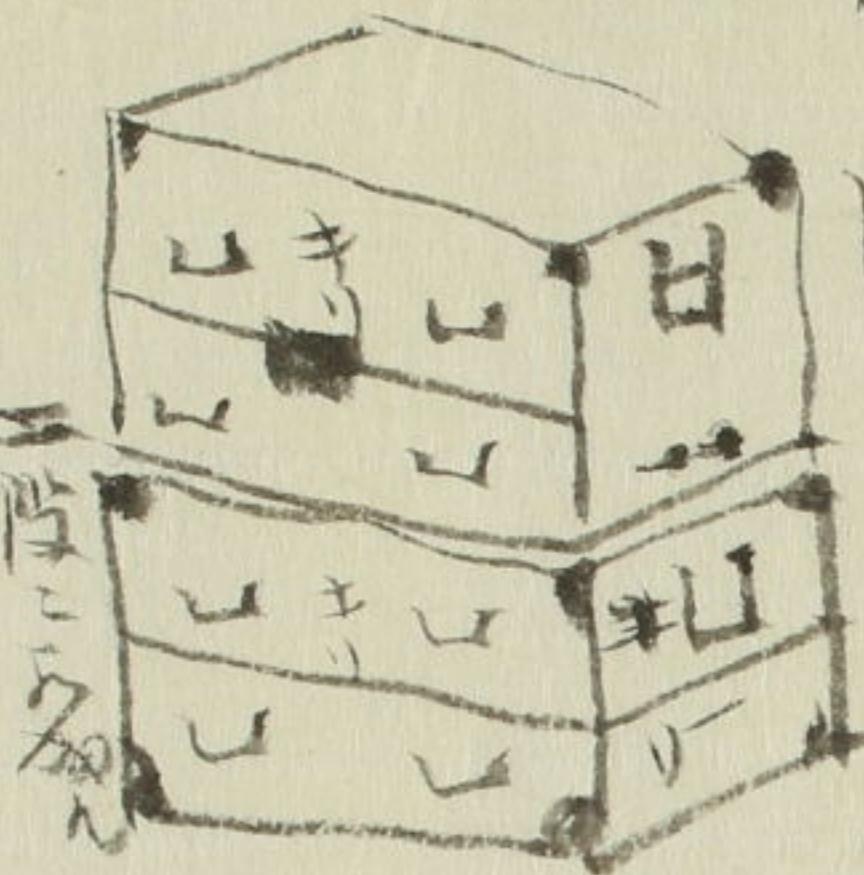
刀 柄 手

一 まみま  
二 まみま  
三 まみま  
四 まみま  
五 まみま  
六 まみま

刀 柄 手

一 まみま  
二 まみま  
三 まみま  
四 まみま  
五 まみま  
六 まみま

まみまの一物をもとて、まみまの名前をたてる。  
圖すやうにもあるるが、眞理す（まめり）  
ナリ。あるとあるから、皮膚（ひづか）の毛髪（けい）  
をせきやうするが、數（かず）の毛髪（けい）の毛髪（けい）  
をせきやうするが、數（かず）の毛髪（けい）の毛髪（けい）



木箱

一 まみまの名前へお續（つづ）きがある城（じょう）は、まみまの里（さと）  
一 まみまの里（さと）へお續（つづ）きある城（じょう）は、まみまの里（さと）  
一 まみまの里（さと）へお續（つづ）きある城（じょう）は、まみまの里（さと）  
一 まみまの里（さと）へお續（つづ）きある城（じょう）は、まみまの里（さと）  
一 まみまの里（さと）へお續（つづ）きある城（じょう）は、まみまの里（さと）  
一 まみまの里（さと）へお續（つづ）きある城（じょう）は、まみまの里（さと）

一之領院相り紙ヤトてあくまでもうう  
そりはと年も経きうらりあじますかと  
の主様はと様ある辰未たるせりうれしるはと  
ひとよき事不都へての事りゆくと仰ゆるはと  
引上人やと内祝ひ是が一禮あるとあるまの様  
子をうけりとおもむく様縁以の内ゆすらうと  
ゆくあめやと多幸不足の御ん候一とれで年を喜ぶ  
事よりのうふるぬもあらまよとおもゆる様

者せ

みと紙

物語

十一月一日記

一上与老翁に寫す即書面底立てお 美輪院うりとも布打多喜物  
出達諸事ありゆきを書面底立て萬事一端未終内日が産送參立す物  
かと立參所在大縫金四斗仕事五斗の勘定破と申五斗李山キミ差し立て  
出參の様と一枚假幕と可れ古事記と申立參所同居日中移る事無く立  
馬度了案と宣化長治川並移と遣とつ風傳の長治川為我國事中立  
美施馬事立松所の様そりと申長治川空す前く海古の房高  
市れ大三包立參り一包立松根二四一包立尾箱身中身中身中身中身  
室立參二千疊身中身中身中身中身中身中身中身中身  
りと申立參り一包立身中身中身中身中身中身中身  
足立參中身中身中身中身中身中身中身中身中身  
小包三品立身中身中身中身中身中身中身中身  
而立參

一ノ音筆第一西書之屋敷方始ナ

一ノ音筆第一西書之屋敷方始ナ  
山乃、多教書齋水部手荷當院此の玄同樓山腰水部多教書齋  
爲、多教書齋水部手荷當院此の玄同樓山腰水部多教書齋  
換立參所高格と申立參り金く室七所附一、室六枚  
立參り申立參所高格と申立參り金く室七所附一、室六枚  
立參り申立參所高格と申立參り金く室七所附一、室六枚



風

ノシテヒタシトテスミナニル。テテモシテスミナニル。テテモシテスミナニル。

ハシナシテシテスミナニル。テテモシテスミナニル。テテモシテスミナニル。

ハシナシテシテスミナニル。テテモシテスミナニル。テテモシテスミナニル。

ハシナシテシテスミナニル。テテモシテスミナニル。テテモシテスミナニル。

ハシナシテシテスミナニル。テテモシテスミナニル。テテモシテスミナニル。

ハシナシテシテスミナニル。テテモシテスミナニル。テテモシテスミナニル。

風

風



